Artist Statement PDF＊

私にとって初めての変身の記憶は、母の手編みのセーターと大好きだったウルトラマンや怪獣のプリントされた服を着ることでした。それを着て父の膝の上に座り、車で近くのおもちゃ屋へ怪獣を買いにいくことが私の何よりの楽しみでした。また近所の公園へ遊びに行く時には、わざわざ自宅へ着替えに戻り変身してから遊びに向かっていました。それらは私を弱虫から強いヒーローにしてくれました。お気に入りの被服に袖を通し、身頃を頭に被せ、ネックホールへ向かう時、それはトンネルのように暗闇の中の向こう側にある新しいヒカリの世界をうつしたような。。その時のワクワクドキドキと高鳴る鼓動の記憶は今でも鮮明に覚えています。これが私の最初の変身の記憶でした。
大人になった私は、変化し続ける大都市の東京へ憧れてデザイナーパートナーと共にファッションブランドを立ち上げました。ファッションデザイナーになった私はファッションを楽しむこと、今この美しい瞬間を纏うことが”生”だと信じて洋服をつくり続けていました。忙しい東京の生活にも慣れた頃、私はしばしば憤りを感じていました。都市の中で増え続ける情報やモノそして人に囲まれてくらすことは、常に変化して新しく感じると同時に大切な何かが失われていくような、溢れたモノに埋もれて消え去っていくような不安や恐怖を抱きました。そして帰宅したある日、自分の部屋の中を見渡すとそこはあらゆる”モノ”で溢れていました。買ったまま一度も着ていない洋服や未開封のフィギアやCDや本など、ありとあらゆるモノで溢れかえっていました。溢れたモノを整理していく中で子供の頃に母からプレゼントされた一枚のアロハシャツを見つけました。そして母が編んでくれたセーターやウルトラマンの服、父とのドライブや怪獣のおもちゃなど幼い頃の記憶を思い出しました。
そして私は１９９９年に東京リサイクルプロジェクトをスタートしました。（このプロジェクトは、消費社会の中で人とモノの関わりから生まれる物語＝記憶を昇華させて再生へと向かうプロジェクトです。) プロジェクトを続けていく中で私はたくさんの人々と出会い彼らの物語に触れることができました。シドニーでのプロジェクトで、ある亡くなられた男性の服を再生することになりました。彼の洋服に触れているときに私はいつもとは違う何か不思議な感覚を覚えました。その人の物語や衣類に宿る感触やニオイはもちろん受けているのですが、それだけではないもっとダイレクトで今を感じるもので、もっと永遠性を感じる何かを受けました。彼が今そこに居て自分と一つに繋がっているような、しかしそれはものすごく遠くの場所にあるような気もしました。ものすごく怖いけど、ものすごく優しい気持ちにもなりました。なにか根底の部分で繋がっているような大きな存在があることに気づきました。それは一つの大きな生命で同じ意識の中にいるような。。もしかしたら私達は大きな一つの記憶を共有しているのではないかとさえ感じました。
父の膝の上に座りドライブしたこと、母の手編みのセーターとウルトラマンの服を着ていたこと、それは暖かく優しい光で包まれている時間、何の不安もなくただた

だ無邪気に楽しんでいた美しい時間でした。これらの記憶は私が消え去っても永遠に繋がり輝き続けるのでしょう。そこはどんな時もいつでも帰れる場所で、永遠に輝き続け、全ての人々が持つ同じ場所であると私は確信しました。

中川正博 2015年